

第1学年芸術科(書道I)学習指導案

指導者(美術領域専攻) ○○○○
(指導担当教員 ○○○○)

1. 日時 平成19年11月2日(金曜) 第4校時(11:30~12:20)
2. 学年・組 第1学年4・5組 計25名
3. 場所 書道教室
4. 単元名 仮名の書
大単元名 古筆の臨書
小単元名 高野切第三種の臨書

5. 小単元の目標

(古筆への関心・意欲・態度)

- ・与えられた名筆を忠実に臨書しようとする。

(書道の古典・古筆的考え方)

- ・連綿の種類・文字のつなぎ方を考える。

(書道芸術表現・処理)

- ・『高野切第三種』を臨書することができる。

(変体仮名の知識・理解)

- ・変体仮名を理解する。

6. 本小単元について

①教材観

本単元に関する『高野切第三種を臨書する』に関し、高等学校芸術科書道並びに小・中学校国語科書写教育の経緯を含めた系統性を揚げる。

小学校・中学校では「書写」の学習があり、高校の授業で初めて芸術としての「書道」の学習がある。「書写」から「書道」への変化の中で初めて出てくる内容の1つに〈仮名古筆〉がある。本題材はその古筆の導入の学習である。この学習においては、仮名古筆を初めて目にした生徒は小学校においてこれだけが正しいと学んだ文字形態とは大きく異なることに対する疑問や、中学校の書写で学ぶ基本的な文字の連続性とはかけ離れた連綿に対するとまどいを持つと考えられるが、この臨書学習により文字を書くことが芸術への拡張を可能にしていることを理解させていくことをねらいとしている。

臨書の学習では、鑑賞における理解ではなく、生徒自身が揮毫に挑み理解していくことが基本となる。その点において、古筆としても代表的な作品である『高野切第三種』は、臨書の初段階での「技法」の導入が行いやすい教材といえる。

古筆を学習する意味は、古筆の特徴を考えると見えてくる。古筆の特徴といえば連綿線と変体仮名である。

連綿とは字と字を繋げて書くことで、字と字を繋ぐ線が実線で書かれている形連と、実線では繋がらないが筆脈が通っている意連とがある。古筆の中の連綿は、三字以上の複数の文字が一筆で書かれていることが多く、普段の生活の中の書では見られることが少ない。しかし、線を繋げて描き、しかも行全体の中心が通っている連綿の学習は、普段縦書きで字を書く際に、中心を通して書くことの基礎となる。

また、変体仮名というのは、一行の中で左右振幅変化をさせ、文字の大小に変化をつけるものである。また、同一文字が各行で並行あるいはそれに近い状況で並んでしまった際、その文字がその作品の中で目立ってしまうのを避けるために変体仮名が使われる。このように変体仮名は、どこでどの文字を使うのかということを考えながら書かれているといえ、

さらに連綿と同時に変体仮名を使えば美の視野を広げるのに有効である。したがって、連綿と変体仮名の学習は、空間構成を考えるということで美の視野を広げることになり、そして平面における線と空間の芸術である書道の感覚を身につけるために最適な学習内容といえる。

②生徒観

仮名作品に触れるのは高校に入ってからが初めてという生徒がほとんどである。日本の文字であるにもかかわらず、連綿があり見慣れない文字がある仮名作品には、抵抗を感じる生徒もいることに疑いはない。本講座の生徒は、ものごとをゆったりと考える傾向が強く、書道が東洋芸術として古くから親しまれていることに興味を示す者が多い。したがって、連綿線がどのように繋がり方や、変体仮名の読み方を一つ一つ着実に理解すれば、仮名作品への抵抗も少ないと考える。

本講座は二つのクラスを合同で行っていることもあり、基本的授業中は静かである。ただ、授業の始まりの時間は休み時間の延長で少し騒がしくなりがちである。

中には、学校以外で書道を学んでいる、あるいは学んだ経験がある生徒も見受けられるが、仮名古筆の技法経験者は皆無である。細筆を名前の揮毫以外に使用した経験がないゆえに、古筆臨書に最適な墨量がわからない生徒が多い。くわえて、指導者の説明が聞けない（態度は悪くない）あるいは全く理解しようとせず自分勝手な方法で進める生徒が若干名いる。さらには書塾の経験者であっても、墨をうまくすることができない生徒が未だ多い。

書く時間にはほとんどの生徒が書くことに集中しているが、教師が近づくと手が止まる生徒も数名見られる。

③指導観

第一次で連綿線のつなぎ方、変体仮名を学習させる。連綿の種類や連綿の仕方を学ぶために、単体の文字と文字とを実際に連綿で書かせる。その際、連綿の規則等を列挙し、実際にいくつかの単語を筆で書かせ、連綿線になれさせる。変体仮名については古筆の中では一音一字でないことを挙げ、練習として第二次に臨書する高野切三種中の変体仮名を練習させる。その後、教科書に載っている変体仮名を使用して作成した補助資料の単語を一通り書かせ、変体仮名になれさせる。

第二次では『高野切第三種』の臨書をさせる。古筆臨書の観点から、文字の大きさや形、墨の濃淡まで酷似するよう指導する。誤りやすい行間・字間にくわえ行頭・行脚の紙面上での配置箇所など細かな点を机間指導にてアドバイスを加えていく。

仮名古筆の授業は今回が初めてであるので、単に見ながら書くのではなく、補助線を入れるなど、少しでも書きやすいように補助プリントを使用し臨書の指導をする。うまくできていない生徒に対し、すべてを訂正せず、少しでもうまくできているところを賞賛し生徒が学習意欲を損なわないことにも留意する。

指導上の補足として、大筆の使用時以上に細かな粒子の墨でなければ墨色がよくなることをふまえて「墨すり」の時間においても机間指導をおこなう。また、細筆を「名前用」以外に使用した経験がない生徒が大半であることから、鋒先の使用部分や含ませる墨量ならびに反故紙の使用方法、筆の持ち方を含めた姿勢について、いくつかのグループの前で教師が生徒の机を借りることで注視させ、実演指導をおこなう。

7. 指導計画（全2時間）

第一次 仮名古筆における変体仮名と連綿 ……1時間

第二次 高野切れ第三種臨書 ……1時間（本時 1/1）

8. 本時の学習

①本時の目標

- ・連綿の種類・つなぎ方を理解できる。
- ・変体仮名を理解できる。
- ・『高野切三種』を臨書（拡大臨書）できる。

②本時の展開

（なお本時（第2次）は、前時間（第1次）との続き授業ため第1次から掲げている）

・前時間（第1次）の展開

○主なる指示・発問 ■評価

| 区分 | 学習活動と内容 (予想される生徒の反応) | 指導上の留意点・支援・評価 (教師の活動) | 準備物・資料等 |
|------------|---|--|---------|
| 導入 5分 | 1. 磨墨しながら説明を聞く。 「ふしみです。」 ・「連綿」を知る。 「ふしみです。」 ・「変体仮名」を知る。 | ○連綿を使って書いた単語を掲示する。 ・見やすい大きさに単語を書いたものを用意。 ・変体仮名を交えて書いたものは、単に連綿で書いたものを同じ文句を書く。 ○「これ、何かいてあるか読んでみてください。」 ○「そうですくふしみ>と書いてありますね。このように、文字と文字をつなげて書いたものを<連綿といいます>。」 ↓ ○変体仮名を交えて書いた単語を掲示する。 ○「ではこれはどうですか？」 ○「実はこれも<ふしみ>と書いてあります。このような、今使われているひらがなとは違う文字を<変体仮名>といいます。」 | 単語 |
| 展開① 20分 | 2. 本時の課題を知る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">変体仮名と連綿法を知り練習をする。</div> ・連綿の説明を聞く。 ・教科書を読む。 ・教科書に連綿の種類を書き込む。 ・連綿を使って書く。 | ○連綿の説明をする。 ○教科書を読ませる。 ○連綿の種類の説明をし、記入させる。 ・二字三字を繋げて書いたものが連綿。 ・教科書記載の4種類の形連と意連。 ○「このほかに、もう1つ<意連>というのがあるので、教科書に書き込んでおいてください。」 ○連綿を使って書かせる。 ・細字を書く際の筆の持ち方の確認 ○「では、連綿の練習をしてもらおうと思いますが、その前に、古典を書く際の小筆の持ち方を確認します・・・」 ○「連綿するときの原則として、文字の書き順は変わりません。注意してください。」 | |
| 展開② 20分 | ・教科書p92・93を書かせる | ○教科書p92・93を書かせる。 | |

| | | | |
|-------------------|---|---|--|
| | <ul style="list-style-type: none"> 変体仮名の説明を聞く。 変体仮名の練習をする。 | <ul style="list-style-type: none"> 机間指導 ○変体仮名の説明する。 <ul style="list-style-type: none"> 導入で見せた変体仮名を使って書いたものを再掲示する。 ○教科書を読ませる。 ○変体仮名の説明をする。 <ul style="list-style-type: none"> (1900年(明治33年)以前は一字に対していろいろな文字が使われていた。) (複雑な文字で作品に変化。) (文字の重複によって目立ちすぎることを防ぐ、あるいは、より複雑な文字形態によって目立たせる。) ○「一音に複数の文字があったということですが、どう言うことかという、94ページを見ると、二つの<ハル>があります。昔は、今使われている<は>のほかに漢字の<八>や<者>を書いて<は>と読んでいました。これを一音一時にしたときに、<は>以外の<八>と<者>と平仮名ではなく変体仮名と呼ぶことにした、ということです。」 ○「また、作品に変化をあたえるということも書いてありますが、このほかに、同じ文字が隣同士に並んでしまうとその文字が目立ってしまうので、変体仮名を使って目立つものを防ぐということもできます。」 ○変体仮名の練習させる。 <ul style="list-style-type: none"> ・プリントの配布：次時限の授業で臨書する歌の中に出てくる変体仮名だけを抜き出したプリントを用意する。 ・プリントの変体仮名を書き終え次第、時間があれば教科書p94の単語も書く。 ○「では、変体仮名を練習してもらおうのですが、変体仮名はとてたくさんあるので、今日は2時間目に臨書する部分に出てくる変体仮名だけを練習してもらいます。」 | <ul style="list-style-type: none"> 次時限の授業で臨書する歌の中に出てくる変体仮名だけを抜き出したプリントを用意 |
| <p>まとめ 5分</p> | <ul style="list-style-type: none"> まとめ <div data-bbox="354 1644 1267 1697" style="border: 1px solid black; text-align: center; padding: 5px;"> 変体仮名を使わず連綿で書こう。 </div> <ul style="list-style-type: none"> プリント記載の単語を、連綿を使って書く。 | <ul style="list-style-type: none"> まとめ ○プリントに載っている単語を、連綿を使って書かせる。 <ul style="list-style-type: none"> ○「そろそろ、この時間のまとめをしてもらいます。プリントの左側に、<連綿で書いてみよう>というのがあります。プリントに直接、単語を、連綿を使って書いてみてください。」 ○「書くときに、変体仮名は使わずに、字形は90ページを参考にしてください。」 ○「どんな風につなげればよいか半紙に書いて確かめてからプリントに記入してください。確 | |

| | | | |
|------------|---|--|--|
| まとめ 15分 | 3. 授業の感想を書く。 ・後片付けをする。 ・次時の内容を聞く。 | ○感想を書かせる。 ○後かたづけをさせる。 ・次時の内容を連絡する。 | |
|------------|---|--|--|

④評価（の観点と方法）

- ・ 連綿の種類・つなぎ方を理解できたか。
→教科書等を見ずに連綿を作れたか。
- ・ 変体仮名を理解できたか。
→高野切三種の歌に、読み仮名を振れたか。
- ・ 『高野切三種』を臨書（拡大臨書）できたか。
→作品の提出。字の大きさや墨の量は適当か。手本を見て字形を真似できたか。

⑤板書計画（前時からの続き）

| | | | | | |
|--|---|--------------------|-------------------|--|--|
| <p>臨書</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 文字の形 ・ 大きさ ・ 墨の量 <p>をそのまま書く</p> | <p>高野切三種</p> <p>は・者・八</p> <p>↙ ↘</p> <p>者・八 は</p> | <p>変体仮名</p> | <p>注・書き順はそのまま</p> | <p>①～⑤意連</p> <p>⑥意連↓実線ではつながらないが筆脈がつながる</p> | <p>連綿</p> <p>文字と文字をつなげて書くこと</p> |
|--|---|--------------------|-------------------|--|--|

⑥資料等

解説用プリントおよび、補足資料